

## テモテ第一5章1-16節 「肉の家族と教会家族」

### 1A 神の真理の柱なる教会 1

### 2A 社会や公に立てられた秩序 2

### 3A 家庭を立てられた神 3

### 4A 感謝して受け取る肉の生活 4

### 5A 家庭を顧みた教会の指導 5

#### 1B 家族関係としての経緯 1-2

#### 2B 霊に仕える奉仕者への恩給 3-8

#### 3B お節介 9-15

#### 4B 肉の家族の務め 16

## 本文

今朝、私たちが見ていきたいテーマは、「肉の家族と教会家族」です。聖書本文は、テモテへの手紙第一の全体なのですが、主に5章を詳しく取り扱います。初めに、3章15節をお読みします。「それは、たとえ私がおそくなったばあいでも、神の家でどのように行動すべきかを、あなたが知っておくためです。神の家とは生ける神の教会のことであり、その教会は、真理の柱また土台です。」

パウロは、ペテロや他の使徒たちと同じように、キリストの弟子たちの集まりを、「神の家」と捉えていました。ここは神の家族であり、かつ生ける神の集会であり、その集まりは、真理の柱であり、土台であると言います。私たちキリスト者は、教会として集っている時に、信仰告白をしているということをととても大切にしていますね。イエス・キリストが主であること。この方が神であられるのに肉体を取られたこと。そして福音を宣べ伝え、不思議や奇蹟を行われ、私たちの罪のために十字架で死に渡されたけれども、三日目に甦り、天に昇られた、ということを知っています。けれども、そうした信条を抱いていればよいというものではなく、そこには非常に現実的な、実際の「家族」という肉付けがあります。いや、むしろ神ご自身が教会のみならず、肉の家族をも立てておられ、そして社会の秩序も立てておられる、というのが、テモテ第一の手紙の主要な点になっています。その中で立派に生活することこそが、「健全な教えにかなった、敬虔な生き方」であるとしています。肉の家族関係や社会生活が神から来ていることを尊びながら生きるからこそ、キリストが罪人を救うために来られた、という福音の真理を証しすることができるのです。教会は神の家であり、そして真理の柱であり、土台であります。

### 1A 神の真理の柱なる教会 1

パウロは、若い牧者テモテに手紙を書くにあたって、論争を生じさせるような違った教えを厳にやめさせるように戒めなさいと勧めました。神の救いのご計画が前進するのは、あくまでも清い心と、

正しい良心と偽りのない信仰から来る愛が目標なのだよ、と言っています。そしてパウロは、何を私たちが宣べ伝えているのかを、自分自身の体験をもって話し始めました。彼は、恐ろしい迫害者でした。神を汚し、迫害し、暴力をふるっていました。ところが、このどうしようもない者が神の憐れみを受け、福音宣教者にされているのだということです。そこで、こう言っています。「1:15 キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。」ですから、私たち教会がキリストが罪人を救うために来られたという、この真理を前面に出して、宣べ伝え、またこの真理を土台として生きることを命じられています。

## **2A 社会や公に立てられた秩序 2**

ところが 2 章に入りますと、パウロは、いきなり、高い地位にいる人々のために祈りなさいと命じているのです。「1 そこで、まず初めに、このことを勧めます。すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。」私たちは、国の首相のために祈っているでしょうか？閣僚のために祈っていますか？都知事のために祈っているでしょうか？一見、これらのことは神の救いのご計画と無関係のように見えます。けれども、パウロは、これが神の救いにとって直結していることを話しているのです。「2:2-4 それは、私たちが敬虔に、また、威厳をもって、平安で静かな一生を過ごすためです。そうすることは、私たちの救い主である神の御前において良いことであり、喜ばれることなのです。神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。」

どうして、高い地位にいる人々のために祈り、願い、執り成し、感謝を捧げることが、神がすべての人を救いたいという真理を知るようになることとつながるのでしょうか？それは、神がこれらの高い地位にいる人々を立てておられるからに他なりません。「ローマ 13:1 人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。」それらの権威者たちは、神によって立てられており、その権威は福音を持っておられる神ご自身から来ているものなのです。ですから、福音を宣べ伝えることを命じられている教会は、社会の秩序を尊びつつ宣べ伝えていくことが御心であり、また社会の中に生きることによって、神の救いも広がっていくことを教えています。

そこで、2 章後半には、公の礼拝において、男が祈りの手を挙げるべきで争わないこと、女は飾り物ではなく良い行いを飾り物として、慎み深くしていなさいということを教えています。私たちは、福音に反する事柄については神の良心に従うべきですが、そうではない本質的ではないことについて、殊更に秩序を崩すようなことをすれば、福音が福音として伝わらなくなってしまいます。教えることについて、教会を指導することについて、男女の秩序が守られていることによって、神の福音が福音として人々に示されていくのです。

### 3A 家庭を立てられた神 3

そこで3章では、指導者である監督と執事についての資格が書かれています。ここで強調されているのは、「非難されることがない」ということです。これは、内実や品性の部分よりも、評判であるとか、外側の人々が見てどうなのか？について話しています。「2:2-3 ですから、監督はこういう人でなければなりません。すなわち、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、品位があり、よくもてなし、教える能力があり、酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で、争わず、金銭に無欲で、」とあります。

そして次に、肉の家庭をきちんと治めているかどうか、大事な点として挙げられています。「4-5 自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。…自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう。…」このように、家庭生活が、神の家を治めることができるかどうかの基準になっています。なぜでしょうか？そう、肉の家族もまた神によって立てられているからです。教会は、キリストの体であり、キリストの栄光を表し、福音を宣べ伝えるのですが、神はまた家族をご自分の栄光のために立てられています。先に男と女の秩序がありましたが、エバがアダムから造られ、そして二人が一心同体となります。そこに子供が生まれます。こうやって、神が家庭あるいは家族として立てられました。教会は、家族にある秩序を重んじ、また家族にある秩序が神の家族の秩序にも関わっていることをここで教えています。

執事についても同じですね、12 節に「執事は、ひとりの妻の夫であって、子どもと家庭をよく治める人でなければなりません。」とあり、これが 13 節、「というのは、執事の務めをりっぱに果たした人は、良い地歩を占め、また、キリスト・イエスを信じる信仰について強い確信を持つことができるからです。」と、イエス・キリストへの信仰と直結しているのです。

### 4A 感謝して受け取る肉の生活 4

そして神の立てた結婚や、また食べてそれを喜ぶことを否定するような教えは、悪霊の教えであると、パウロが4章で警告しています。3節を読みます、「結婚することを禁じたり、食物を断つことを命じたりします。しかし食物は、信仰があり、真理を知っている人が感謝して受けるようにと、神が造られた物です。」結婚にしても、食物にしても、肉体に関わることであります。教会は霊に関わることであり、これらのことを軽んじたり、無視したり、ましてや反対したりするのであれば、それは偽りの教えであり、偽善であり、悪霊から来ており、信仰から離れさせると言っているのです。つまり、こうした肉体に関わることをも神は、感謝をもってそれを受け入れることによって、信仰生活が成り立ち、真理を知ることができると教えています。

そして、若い牧者テモテに対して、聖書を教えること、勧めることについて、実際的な生活や行動も含めて、信仰の模範になるようにと教えています。「4:12 年が若いからといって、だれにも軽く

見られないようにしなさい。かえって、ことばにも、態度にも、愛にも、信仰にも、純潔にも信者の模範になりなさい。」

## **5A 家庭を顧みた教会の指導 5**

### **1B 家族関係としての経緯 1-2**

年が若いというだけで、軽く見られてしまうというのは現実です。けれども、それでも家族関係を考えれば、どのように教会にいる兄弟姉妹に接すればよいかは自ずと分かるということです。5章1-2節を見てください。「5:1-2 年寄りをしかつてはいけません。むしろ、父親に対するように勧めなさい。若い人たちには兄弟に対するように、年とった婦人たちには母親に対するように、若い女たちには真に混じりけのない心で姉妹に対するように勧めなさい。」

年寄りに対しては、叱ってはいませんが、「叱る」という言葉は「詰る」ような叱りつけのことで、そして、「勧める」というギリシヤ語は、「励ます」であるとか、あと「助け主」と聖霊のことを言う時に訳されたパレクレオーの動詞形が使われています。父に対しての敬いを持っていれば、このことは自ずと分かります。そして年取った婦人に対しては母親のように、それから、若い女性に対しては、そうですね、肉の家族で姉や妹に恋愛感情や性的対象として見るでしょうか、あり得ません。そういった自然の家族に対するような感情で接します。

### **2B 霊に仕える奉仕者への恩給 3-8**

そして次、3節から始まり寡についての教えは、私たち教会生活をする者たちに大きな示唆を与えてくれます。

### **3 やもめの中でもほんとうのやもめを敬いなさい。**

寡を敬うという言葉、私たちには馴染みが薄いと思います。なぜなら、現代の社会では、社会福祉制度が発達しており、夫がいなくなっても残された婦人は生活のできる制度があるからです。けれども、旧約の時代にも新約の時代にも、それが無かったという背景の違いがあります。神は、寡に対して多くを語られました。「申命 10:17-18 あなたがたの神、主は、神の神、主の主、偉大で、力あり、恐ろしい神。かたよって愛することなく、わいろを取らず、みなしごや、やもめのためにさばきを行ない、在留異国人を愛してこれに食物と着物を与えられる。」

その中で、「ほんとうのやもめを敬いなさい。」と命じています。寡は助けるというのは前提での話です。けれども、本当に寡なのかどうかを確かめなさいと命じています。その理由は二つあります。一つは、教会における経済的な事情です。既に教会が誕生してからすぐに、寡に対する配給に関連して、問題が生じていました。「使徒 6:1 そのころ、弟子たちがふえるにつれて、ギリシヤ語を使うユダヤ人たちが、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情を申し立てた。彼らのうちのや

もめたちが、毎日の配給でなおざりにされていたからである。」配給において、不公平感を募らせていた者たちが出てきました。

しかしそれ以上に、もっと大切な事があります。霊的な事情です。この配給の問題が生じた時に、使徒たちが祈りと御言葉という教会において最も大切な奉仕が疎かになっていったということがあります。教会というのは、神の家族に対して善を行なうように召されています。「ガラテヤ 6:10 私たちは、機会のあるたびに、すべての人に対して、特に信仰の家族の人たちに善を行ないましょう。」しかしながら、神の家族は祈りと御言葉、すなわち霊的な活動の場所です。このことが重んじられる中で、善が行なわれます。こういうことが起こるので、霊的な事柄をないがしろにして善を行なうと、その善によってかえって、その人が墮落してしまう、信仰から離れてしまうということが起こってしまうのです。

4 しかし、もし、やもめに子どもか孫かがいるなら、まずこれらの者に、自分の家の者に敬愛を示し、親の恩に報いる習慣をつけさせなさい。それが神に喜ばれることです。

寡と言っても、扶養できる子供や、また子供がいなければ孫がいるならば、本当の意味での寡ではないということです。確かに夫はいませんが、全く身寄りがないということではありません。けれども、これは単に経済的な理由だけのことではありません。いや、それ以上に「神に喜ばれること」と言っています。先ほどからお話しているように、神は、家族をも制度としてお立てになっています。

5 ほんとうのやもめで、身寄りのない人は、望みを神に置いて、昼も夜も、絶えず神に願いと祈りをささげていますが、6 自墮落な生活をしているやもめは、生きてはいても、もう死んだ者なのです。7 彼女たちがそしりを受けることのないように、これらのことを命じなさい。

本当の寡という定義をパウロはテモテに与えています。彼女は、非常に大きな霊的奉仕を教会においてしており、無くてはならない存在なのです。たとえ、体力が衰えて、自分の体を動かして教会で何かの奉仕ができなくとも、その思いと心、口を動かして主に対して祈ることはできます。いや、祈ることこそ使徒たちが優先した奉仕の一つでもあり、非常に霊的な奉仕なのです。新約聖書の中には、アンナという女預言者が登場しますが、彼女は宮を離れず、夜も昼も、断食と祈りをもって神に仕えていました(ルカ 2:36-37)。彼女は、教会が扶養すべき人ですが、なぜなら、霊的な奉仕をする人、すなわち教会のスタッフだからです。

このような霊的な奉仕をしないで、教会で養ったらどうなるかという、やっではいけない数々のことを行なっているということでもあります。具体的にどのようなことを行なっていたのか、よく分かりません。現代においてよくあることは、いろいろな要求をしてきて、それを行なっても不満は口

から消えず、そして一度そのことをやめると非常に怒って、「私は教会をやめる」というような例です。そして、そうしたごく一部の寡のせいで、寡の方々全員がそしられるようになってしまいます。「もう、寡を助けることはやめよう。」という流れになってしまうことを、パウロは危惧しています。

8 もしも親族、ことに自分の家族を顧みない人がいるなら、その人は信仰を捨てているのであって、不信者よりも悪いのです。

再び、親族や家族を顧みることの重要性を、パウロは強調しています。不信者の中でさえ、扶養の義務を守っているのに、それを怠ったら不信者より悪いのだと言っています。なぜなら、家族の制度は、神ご自身が立てておられるものだからです。

### 3B お節介 9-15

9 やもめとして名簿に載せるのは、六十歳未満の人でなく、ひとりの夫の妻であった人で、10 良い行ないによって認められている人、すなわち、子どもを育て、旅人をもてなし、聖徒の足を洗い、困っている人を助け、すべての良いわざに務め励んだ人としなさい。

初代教会の中には、寡として教会が支えるという名簿があったようです。そこには、「六十歳未満の人でなく」という規定があります。本当に年寄りで身寄りがないことが一つの条件です。それから、「良い行ないで認められている」というのがもう一つの条件。そうです、あくまでも教会において奉仕者として認められている人々こそが、教会が敬う寡として名簿に載せます。そして、教会としての恩給の意味合いもあるでしょう。

11 若いやもめは断わりなさい。というのは、彼女たちは、キリストにそむいて情欲に引かれると、結婚したが、12 初めの誓いを捨てたという非難を受けることになるからです。

六十歳未満の若い寡は断ります。12 節に、「初めの誓いを捨てた」と言っていますが、これは夫の死後も結婚してはいけない、再婚はいけないということではありません。14 節にパウロは、結婚しなさいとむしろ勧めています。ここは、「教会において寡として生きています」という誓いのことです。主に専ら仕えるため、つまり祈りに専念するなど、フルタイムの奉仕者として生きることを誓った、その誓いのことを話しています。けれども結局、若い時は結婚をしたいという願望が強くなれば、これまで支給してきたことは一体なんだったのか？という誹りを免れません。

13 そのうえ、怠けて、家々を遊び歩くことを覚え、ただ怠けるだけでなく、うわさ話やおせっかいはして、話してはいけないことまで話します。

支給をすることによって、大きな霊的問題が出てきます。「怠ける」ということです。怠けることは、

箴言の中で何度も何度も、問題であることを話し、何事においても勤勉であるように命じられています。善を教会として行なっているはずが、かえってそれが人を駄目にしてしまう場合があるのです。この問題は、現代社会にあるキリスト教会の中でしっかりと取り組む必要のあるものです。助けを与えることが、必ずしもその人の益になることではないということです。むしろ、その善が利用されて、あらゆる罪を犯してしまう温床とさえなるということです。

同じことが、テサロニケ人の教会で起こりました。パウロが厳しく戒めています。「2テサロニケ 3:10-12 私たちは、あなたがたのところに行ったときにも、働きたくない者は食べるなと命じました。ところが、あなたがたの中には、何も仕事をせず、おせっかいばかりして、締めりのない歩み方をしている人たちがいると聞いています。こういう人たちには、主イエス・キリストによって、命じ、また勧めます。静かに仕事をし、自分で得たパンを食べなさい。」キリスト者として、善を行わなければいけないとして、行ないます。「このような必要があるから、助けてください。」という声が聞こえ、それに応答します。けれども、実は自分の欲を満たすためにキリスト者の善を利用するという罪があるのです。こういう人たちには、14-15節、「特に注意を払い、交際しないようにしなさい。彼が恥じ入るようになるためです。しかし、その人を敵とはみなさず、兄弟として戒めなさい。」厳しく戒める、ということが必要なのです。それが彼のためになるのです。このことで、善を行なうことが何の意味があるのか？と虚脱感が襲います。けれども 13 節で、「しかしあなたがたは、たゆむことなく善を行ないなさい。」とパウロは勧めています。

ところで、若いやもめたちが、「うわさ話やおせっかい」をすと言っていますが、なんでうわさ話やお節介をするのでしょうか？単純に暇なのです。本当に主にお仕えするなら、噂話やお節介をする暇さえなくなります。愛の行ない、祈り、人々に仕えることで精一杯で、そこに労苦しているのであれば、そんな余計な思いは出てこないはずです。

14 ですから、私が願うのは、若いやもめは結婚し、子どもを産み、家庭を治め、反対者にそしる機会を与えないことです。

ここに肉の家族が神から与えられていることとのバランスがあります。神の家族である教会で仕えることは、肉の家族として与えられている使命を全うすることによって、健全なかかわり方を持つことが出来るということです。そして、「反対者にそしる機会を与えない」とあります。先ほど話した社会性です。ただでさえ、キリスト教会は非難を受ける存在です。迫害を受けます。ですから、神を知らない人たちの間で立派にふるまう必要があります。それゆえ、しっかりと家庭を築くことは、霊の戦いの防御となります。

#### 4B 肉の家族の務め 16

16 もし信者である婦人の身内にやもめがいたら、その人がそのやもめを助け、教会には負担を

かけないようにしなさい。そうすれば、教会はほんとうのやもめを助けることができます。

寡本人は未信者で、教会に行っていない場合のことです。信者でない人については、たとえ信者の身内であっても、教会に負担をかけないようにしなさいということです。こうやって、神の教会と、肉の家族との関わり合い、そのバランスがあります。これをよく考えることは、健全な教えにかなったものであり、敬虔な生き方だということです。そして、その中で、キリストが罪人を救うために世に来られたという福音が、そのまま福音、良き知らせとして広がっていきます。